

鎌倉を主要拠点に、広告、ゲームアプリ、マンガを活用したコンテンツ開発などのIT事業のほか、地域創生支援やウェディング事業、不動産業など、多種多様なビジネスを生み出し続ける株式会社カヤック、通称「面白法人カヤック」。経営理念は「つくる人を増やす」こと。慶應SFCの同級生だった創業者3人のベンチャー精神を核に、唯一無二の存在感を放っている。そして、企業として「まち全体が、ぼくらのオフィスです。」と宣言している。鎌倉駅西口近くに土地を取得して、2018年に新たに研究棟・会議棟を建設。そのほか、まちなかにオフィスを点在させ、鎌倉の企業で働く人たちのために「まちの社員食堂」を開業するなど、自社の内と外の境目をなくし、回遊性や開放性を高めている。「何をするかより誰とするか、誰と一緒に働くか。そのためのワークスペースを大事にしています」（広報部長・人事部 渡辺裕子氏）。

東京に比べて、情報の集積や顧客との行き来には不利だとしても、鎌倉にオフィスを持つことは同社にとってアイデンティティそのもの。柳澤大輔CEOが自著『鎌倉資本主義』（プレジデント社）で主張するように、地域コミュニティの人とのつながり、海と山、伝統文化に囲まれた環境資本というソーシャルキャピタルを大事にする。ICTの進展は距離

の問題をなくしてくれるし、むしろ同社のビジネスの進化を加速させる。

研究棟・会議棟がまちに溶け込むように設計されたユニークなオフィスビルである一方、鎌倉らしく風情ある古民家オフィス2棟も構える。表紙のラボは3Dプリンターやレーザーカッターを備えるモノづくりの場。もう1棟は会議室として、社内外の人が利用している。

さらに、大事な文化が「プレスト（ブレンストーミング）」。

企画立案や顧客の課題解決だけでなく、社内で「困りごと」が発生したら“この指とまれ”ですぐに社員が集まり、自由に対話が始まる。屋外にある「ガーデンオフィス」には、キャンプ場さながらの「焚き火会議室」を

昨年設置。密を避けて対話できる環境が実現した。どのオフィスも、内と外、オンとオフを緩やかにし、想いを共有して、創造性を最大限に引き出す工夫がある。デザインオフィスがあるから創造的なカルチャーができたのではなく、創造的な人と組織文化を大事にしたから、オフィスという場が多様に生まれていった。それがカヤックのカルチャーなのだ。

(写真/元家健吾 [表紙、P11] 取材・文/根本洋子)



取締役の藤川綱司氏と渡辺氏。たまたま通りがかった社員でも自然と場に巻き込めるのがプレスト文化ならではの。「ガーデンオフィス」のなかにある「焚き火会議室」（写真）は、鎌倉の空気を感じながらミーティング、ランチ休憩ができる



「まちの社員食堂」では週替わりで鎌倉のいろいろな飲食店の料理を提供する

趣あるラボ「古民家Make Room」。木造の温かみを生かし、看板もラボで自作

KAIKAを支援する! JMAの事業活動のご紹介

社会とともに花開く、人・組織づくりを目指して

KAIKAアクション宣言

2021年
3月31日時点
91 組織が
認定!!

ご応募受付中!

KAIKAの考え方に賛同し、その実現に向けて取り組んでいる企業・団体を「KAIKAアクション宣言組織」として認定し、応援します。個人の成長、組織の活性化に向けて、「KAIKAに取り組みたい!」という皆様のご応募をお待ちしています。



認定制度の詳細、ご応募はホームページをご覧ください。
<https://kaikaproject.net/action-organization/>



メリット
1

組織の取り組みPR

「社員の成長」を促し、組織として社会的価値を創出したり、社会とつながる活動が行われたりしていることを社内外にPRできます。

メリット
2

人材確保・組織イメージ向上

社員の成長を応援し、社会的に意義のある事業を行っている組織であることをアピールすることで、人材の確保につながります。

メリット
3

組織内における活動の推進力アップ・モチベーション向上

取り組みを内外に公表することで、組織として目指す目標達成への推進力となり、活動に参加する社員のモチベーション向上につながります。